

学校給食における食物アレルギー事故に関する一考察

田宮 一 (愛知教育大学)

1. 目的

2012年に東京都調布市の小学校の女子児童が給食中に、食物アレルギーによるアナフィラキシーの疑いで亡くなってしまふ事故が発生した。本研究では、事故が起きてしまふ際のアレルギー対応の課題と解決策を検討して、給食中の食物アレルギー事故で亡くなる児童生徒を防ぐことを目的とした。

2. 方法

調査方法は文献調査とした。日本学校保健会のガイドライン、文部科学省の食物アレルギー対応指針などから改善点を考察した。また、調布市のアレルギー事故検証結果報告書から事故防止の方法を探ることとした。

3. 結果と考察

1) ガイドライン、対応指針から考察する

どちらもページ数が多く、不必要な情報が多く掲載されている点が問題である。事故が起こった際の対処法の確認に時間がかかってしまふ、対処に遅れが生じてしまふ。教員・調理員・管理職向けにそれぞれのマニュアルを作成すれば、場面ごとに適切な対応が可能である。

また、アナフィラキシーが起こってしまった際のエピペンを打つかの判断がしにくい点が問題である。様々な打つべき症状の一覧から当てはまる症状を確認してエピペンを打つような対応では遅すぎる。エピペンは副作用が軽微であるため、いつもと違ふ症状であれば「迷わずエピペンを打つ」という文面を取り入れたマニュアルを作成することで、事故が発生しても死亡事故は防ぐことができる。

2) 調布市の事故結果報告書から考察する

事故の主な要因は、除去食一覧表での確認

を怠ったこと、エピペンを打つのが遅れてしまふたことであつた。しかし、今回の事故は周りが誤食に気づくことができたら防げたのではないか。教師1人の確認だけではミスが起こる可能性がある。子どもたちがアレルギーとは何かを学び、クラス全体で対処できる体制作りが必要である。これまでのアレルギー対策では、周りの子どもたちは傍観者として除外されてきた。アレルギーは誰にでも発症する可能性があり、他人事ではない。全員でアレルギーについて学び、役立てていくことが必要である。

4. 結論

学校給食では、アレルギーを持つ児童生徒自身が食物アレルギーについて理解することはもとより、食物アレルギーを持つ友達が、何を食べてはいけないかをクラス全員が理解して注意できる環境をつくることで事故は防ぐことができる。もしアナフィラキシーショックが起こってしまった際には、周りが協力し合い、「いつもと違ふ症状だと判断したら迷わずエピペンを打つ」ことで死亡事故を防ぐことができるだろう。ガイドラインや指針といったマニュアル系の早急な改善が事故で亡くなる児童を防ぐだろう。

〈参考文献〉

- 1) 大野泰子 (2015) 今日の食物アレルギー対応と学校 鈴鹿短期大学紀要 pp25-35
- 2) 日本学校保健会 (2007) アレルギー疾患に対する取り組みガイドライン
- 3) 調布市立学校児童死亡事故検証委員会 (2014) 調布市立学校児童死亡事故検証結果報告書
- 4) 文部科学省 (2015) 学校給食における食物アレルギー対応指針